

一八八六(明治十九)年五月三十日



(125) 移転後の同志社仙台分校・東華学校\* (宮城英学校を改称) の旧校舎

た。キリスト教は「愛をもってこれを貫く」のが特徴、と説く。

「キリスト教とは何か」と人から尋ねられたら、「愛をもってこれを貫く」と答えたい。

かつて日本には神の愛という教えがなかったから、愛

といえただだ君臣の愛や夫婦の愛、それに親子の愛や兄弟、友人の愛に限られた。それゆえ、とかく片寄った愛のみが行われ、聖書のこの箇所(エフェソの信徒への手紙 三・一三以下)にあるようなキリストの愛は、キリスト教が日本に入るまでは耳にすることができなかった。

神は義なる者にも不義なる者にも公平に雨を降らせ、陽を照らされる。神が完全であるというのは、すなわちこの愛なのである。事あるごとに私たちのために配慮してくださる。この愛で人間を導こうとされる。それなのに私たちはとかくそれを忘れてしまう。神の愛は被造物から推しはかるべきである。例をあげると――

小山田高家は新田義貞のために死んだ。  
楠正成は後醍醐天皇のために命を捧げた。

五百人の義士が斉の田横のために殉死した。

赤穂の義士たちは彼らの主君のために仇をうった。

プロシアの皇帝の一言が負傷した兵士を感激させた。

母親のひと粒の涙が道楽息子を改悛させる。

かつてキリストは、「山上の説教」(マタイによる福音書 五・一以下)で「右の頬を打たれたら左をも差し出し、一里行けと言われたら二里行け、上着を取られたら

下着をも取らせよ」と教えられた。

キリストの愛は広く、深く、また高い。

一学生は、「キリストで感心するのは、心が広くて、自分の敵の罪を許すように、と十字架の上でも神に祈られたことだ」と言った。これは人間にはできなくて、キリストだけが可能である。

キリストは私たちを救うために自分の食べる物を問題にせず、自分の立っている所も人に譲られる。また人に逆らわず、すなおに捕縛されてゲツセマネの刑場に引かれ、裁く人の前でも沈黙して言い訳せず、荆棘の冠さえ受けて十字架につけられ、自分を罰する者を許せ、と祈って死なれた。

キリストはこの愛をもってこの世に來られ、神の道を説かれ、私たちが救うために荆棘の冠を被せられ、十字架に磔られた。また、この愛を

もって私たちが近くに引き寄せ、今も私たちの心に働きかけられている。

愛は忍び、許すものである。一見、弱々しく無力に見えるが、天下の誰が愛に敵対できようか。犬や猫でさえも人間の愛に動かされるではないか。

# 真神の道は愛を以てこれを貫く

(126)「真神の道 愛を以てこれを貫く」(新島の書)

裏